

露の団六さんが神戸からやってきます!

団六さんの落語とお話を聴きにきてください

昨年、団六さんは毎日新聞にダウン症の兄「ノリオ」さんのことを連載しておられました。

弟として障がいの兄を受け止めるとは
どのようなことなのでしょう。
そのころのうちを聴けるチャンスです。
そんなにあることはありません。
ぜひ、おいでください。

経験できることには限界があります。
しかし、私たちには想像力が備わっています。

話を聴く体験を通じ、
学んだことを取り込み、
考えや行動を導き出すことができます。

誰もが老い、死を迎えます。
それまでの長い道のりを最後まで自己実現へと
向かう旅をしています。
「障がい」の意味は根源的です。
一人ひとりの生き方に深くかわりがあると思います。

団六さんのお話しに耳を傾ける時間を一緒に。
ぜひ、ぜひ、おいでください。
お待ちしております。

バリアフリーの社会を目指して

露の団六さんの落語と講演

落語「子ほめ」(予定)

講演「ダウン症のアニキをもって」

2006年10月22日(日)午後1:30

会場: 電気通信大学

創立80周年記念会館3階フォーラム

京王線調布駅北口より3分

入場無料

主催/特定非営利活動法人海から海へ

後援/調布市 電気通信大学 調布市教育委員会

協力/(株)キャンパスクリエイト

平成18年度調布市社会教育関係団体補助金交付事業



フロイトの家の前で In Front of Dr. Freud's House
910x727(mm) © Mizuki Tanaka 2004

編集後記

梨、ぶどう、柿など、秋の果物の彩りが美しい。画家の友人吉祥寺の珈琲店Sさんの豆の香りが漂う。妻や娘の作るパンは、噛みしめると複雑で深い味がする。朝、体が動きはじめる前の時間、ボーっとした頭で今日の仕事のことを考えるひと時でもある。

画家は、高齢者グループホームのヘルパーの仕事に就いた。連絡帳には利用者の方や職員との交流が記されている。他の人の役に立ち、頼りにされている様子とともに、利用者さんや同僚の名前を覚えて本人から声をかけたこと、少しからだがつぶつぶって「大丈夫?」と氣遣われたこと、等々のエピソードが、周りの人によって書かれている。その文章には優しさとともに、嬉しさや新鮮な驚きを感じられる。画家のいる職場では、ふだんどこにでもある小さなことが、大事なこととして感じられ、真実と気づく、ということのように思う。

仕事とは、小さいけれど役に立つこと、と分かる。(輝)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2006年10月9日 海から海へ No.12

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田1-43-3

オリエントマンション108 うつわ和季内

Tel & Fax 042-441-2958

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価200円

無断転載禁止